

入学式式辞

諸君

まさに春爛漫の好季に、山口大学教育学部附属山口中学校第七十一回入学式を挙行できることを大変喜ばしく思います。また挙式に当たり多数のご来賓の方々にご臨席賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、校長の第一の職務は入学の許可です。許可はしますが入学するのは諸君自身です。しかし「入学」とは何ですか。分かった気になっているだけではありませんか。「入学おめでとう」などと言って浮かれているうちは本当の入学を果たすことはできません。

小学校、中学校、高校、大学とそれぞれに入学はありますが、本当の入学はただ一度しかありません。「入門」と申しますね。「入学」とは学びの門が開くということです。「学ぶ」ということが諸君の人生で初めて起ること、これを「入学」というのです。

それでは「学び」の門が開くとはどういうことでしょうか。ここでそれを少し考えて見ましょう。皆さんは夏目漱石に『坊ちゃん』という小説があることを知っていますか。知っている人は手を挙げてください。宮沢賢治の「やまなし」はどうですか。知っている人？

ありがとう。知っているのは学んだことがあるからですね。ですが名前を知っているだけでは深く学んだとは言えませんね。それではどうなのが『坊ちゃん』『やまなし』を深く学んだ、ということになるのでしょうか。在学生諸君も一緒に少し考えて見てください。

どうですか。言葉が出てきましたか。それでは隣の人と話し合ってみてください。どうぞ。後で手を挙げてもらいます。在学生諸君も参加してください。

それでは手を挙げてください。

(一年生) 作者の意図を理解した時です。

(他の一年生) 作者の意図を授業で学んだ時です。

(佐野) なるほど。ありがとう。どれも素敵な答えですね。でも、もしかしたら夏目漱石も意図なんかなくて、自分でも分からないものにぴったりした言葉を与えていたのかもしれないね。

私は次のように考えています。これで分かった、というのは深い学びではありません。どこまでも分からない、学んでも学んでも学び尽くすことのできない深いものに触れること、これが深い学びです。『坊ちゃん』や『やまなし』を読んで「深いなあ。何度読んでも読みつくせそうもないなあ」という感動は、何かが分かった、というのとは本質的に異なる喜びです。どんな教科でも、分かったりできたりすれば誰でも嬉しい。しかしもっと尊い経験というものがあります。それはどこまでも分からない、到達できない深いものに触れるということです。分かるならやる、できるならやる、結果が出るならやる、という人は分からなければ、できなければ、結果が出なければ学ぶことはできません。これに対し学んでも学んでも学び尽くすことのできない深いものに会った者は、分かっても分からなくても、できてもできなくても学び続けることができます。深みを学ぶということは、例えば『坊ちゃん』

で言えば単に小説としての深みに触れるということではありません。自分がその身である人間や人生の深みに触れるということです。音楽を学ぶということは音楽の感動を通じて人間を学ぶということです。こうしてあらゆる学びがその根本において人間を学ぶということです。こうした学びを通じてどこまでも分からない深い「人間」の存在に目覚め、学びつくせない深い人生をどこまでも学んでいくという生活が始まること、これが真の「入学」です。その時に私は心から「おめでとう」と言いたいと思います

さて、最後になりましたが、新入生の保護者の皆様、本日からお子さんを、山口大学教育学部附属山口中学校の生徒として、おあずかりいたします。お子さんが、「創造的な知性と判断力を身につけ、自他を敬愛し、進んで奉仕をし、そして、たくましく生き抜く力を身につけた人間」となるよう、教職員一同、力を合わせて育てて参ります。本学園は、山口大学教育学部の教育実習の場となり、また学部・大学院との協力のもと先導的な取組を行い、「公教育のモデル校」となることを通じて、山口県の教員の資質・能力の向上、教育活動の推進に寄与するという使命を負っています。本附属中学校の設置の趣旨をご理解いただき、教育・研究の推進に、皆様の多大なご支援、ご協力を賜りますことをお願い申し上げ、入学式の式辞といたします。

平成二十九年四月十日

山口大学教育学部附属山口中学校

校長 佐野之人